

多文化関係学 2007,4,123-132  
Multicultural Relations 2007,4,123-132

研究ノート

## 多文化関係研究における構築主義的アプローチの有効性 —ライフストーリー研究を中心に—

Effectiveness of a Constructionist Approach in Multicultural  
Relations Research: In the Case of Life Story Research

石黒 武人 Taketo Ishiguro<sup>1</sup>

### 要 旨

本稿は、対話的構築主義（桜井, 2002）という立場に依拠したライフストーリー研究が多文化関係の理解と説明を志向する研究に対してどのような点で有効であるのかについて論じるものである。第1に、対話的構築主義は、関係的存在としての個人に焦点を当てるため、多文化的状況において生活する人びとの個別性を記述すると同時に、個人の認識形成に影響を与える多文化関係をも捉えることを可能にする。第2に、対話的構築主義では、インタビューにおける語りを「事実の口述」として捉えず、インタビューという相互作用場面で「構築される言語的表象」とであると捉えるため、多文化関係を生きる人々が言語を介して行う現実構築のあり方に近接することを可能にする。第3に、対話的構築主義は、インタビューにおける調査者の立場を「中立的立場」から「共同制作者」として捉え直すため、研究者が「中立性」を装うことを許さず、調査対象者と研究者のインタラクションを分析の対象とした。この分析枠組みにおける転換は、語り手が関わる多文化関係をより慎重に読み取ることが可能にする。以上のような点で、対話的構築主義は、多文化的状況における関係の理解と説明を目指す研究に対して有効であるといえよう。

キーワード：社会構築主義、ライフストーリー研究、語りとしての生、多文化関係

### Abstract

The purpose of this paper is to demonstrate that one form of life story research of a social constructionist approach (Sakurai, 2002) contributes to multicultural relations research. The paper shows that Sakurai's approach allows researchers to look at a few individuals to reveal not only individual idiosyncrasies but also multicultural relations that the individuals carry in their interactions. It also facilitates researchers to regard life stories not as the mere reflections of real life but temporary representations. Based on this view, researchers can examine how interviewees represent their multicultural experiences through language. Moreover, in this approach researchers regard themselves as constructing interviews with interviewees. These views all contribute to understanding and explaining multicultural relations.

Key words : social constructionism, life story research, life as told, multicultural relations

---

1. 所属：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程  
東海大学・神奈川大学非常勤講師 〒244-0801 神奈川県横浜市戸塚区品濃町1835-29 コーポレート東戸塚303  
(Tel)045-824-7255 (E-mail) ttn4dpt28z@mx6.ttcn.ne.jp

## 1. はじめに

3つ以上の異なる文化<sup>2</sup>、もしくはその担い手である人々が互いに関わる場面において形成される関係とはいかなるものであろうか。本稿では、そのような関係を理解し、説明することを志向する研究を「多文化関係研究」と表現したい。例えば、イタリア人、日本人、ドイツ人そしてアメリカ人といった多様な文化的背景を持つメンバーによって構成されるカー・デザインの多文化チーム(アドラー, 1996)がある。チーム・メンバーの間では、日々のコミュニケーションを通じて、どのような関係が形成されているのであろうか。

そのような多文化関係の研究には一体どのような理論的・方法論的枠組みが有効なのであろうか。本研究の焦点は、多文化関係研究において有効であると考えられる研究アプローチについて考察することである。多文化関係を理解し、説明しようと模索する上で、様々な研究分野からのアプローチが可能であると考えられるが、本稿では、社会学者の桜井が提唱した対話的構築主義のライフストーリー研究(桜井, 2002)に着目し、その研究アプローチが持つ3つの特徴が、多文化関係の理解と説明を目指す研究に対して、どのような点で有効であるかについて考察しようとするものである。

では、以下のような構成で本論を展開したい。まず、対話的構築主義のライフストーリー研究(以下、「対話的構築主義」)が何を明らかにしようとしているのかについて述べる。続いて、対話的構築主義について、1) 個人の捉え方、2) 「語りとしての生」(桜井, 2002, p.31)、ならびに 3) 調査者の位置づけ、という3つの点から詳説し、その特徴を明らかにする。その際、3つの特徴が多文化関係研究に対してそれぞれどのような点で有効であるかについて論述する。以上のような構成で論述を進めたい。

## 2. 対話的構築主義の射程

ライフストーリーは「個人が歩んできた自分の人生(ライフ)についての物語(ストーリー)である」(桜井, 2005, p.10)。「ライフストーリー」よりも一般的に定着した感のある「ライフヒストリー」という研究方法の名称から、「ライフストーリー」は人生全体についての語りを想起させることが多い。しかし、必ずしも人生全体についての語りというわけではなく、人生の一部、一局面についてインタビューを受ける

---

2. ここでは、文化を広義で捉え、国民文化、副次文化、対抗文化などを含み、人々の思考・感情・行動様式に影響を与えるものであるとしたい。

人々が選択的に語るものの集積であることが多い。

様々なスタンスから行われているライフストーリー研究のうち、本研究で扱うのは、対話的構築主義という立場に依拠するライフストーリー研究である。対話的構築主義は、人々の語りを通じて表現された主観的リアリティを捉え、語りで構築される多様な認識世界のあり方を記述する研究活動である。ミクロな個の語りとその個別性を重視しつつ、個人が対話の中で語りを紡ぎだす際に依拠するマクロな社会的関係をも捉えようとする試みである。

では、対話的構築主義について、1) 個人の捉え方、2) 語りとしての生、3) 調査者の位置づけという点から詳説し、その特徴を明らかにしたい。その上で、多文化関係研究におけるその有効性について論述したい。では、まず、個人の捉え方について言及する。

### 3. 個人の捉え方

中野(1981)は、日本における社会学の方法に関して、個人を十分に対象として扱ってこなかったという議論を展開した。とりわけ、性別、年齢別、階層別、職業別といった集団の枠組みで人々もしくはその行動を説明しようとする試みが支配的で、個性ある諸個人を扱ってこなかったとする指摘である。この指摘は、文化を研究対象の中心に据え、その文化の担い手である集団を扱ってきた自らを含む多くの研究者に該当するのではないだろうか。

とはいえ、社会に対して有益な研究成果を提示するという観点から、特定の社会集団に焦点を当て、研究を進めることはごく自然なことであろう。では、なぜ対話的構築主義は個人に焦点を当てるのであろうか。その答えを考える上で、佐藤(1995)の個人に関する説明が助けとなる。佐藤(1995)によれば、個人は社会における「関係が複雑に集積する〈場〉」(p.19)である。個人には社会が反映されているという見方である。

この見方と同様に、対話的構築主義もまず個人を照準にした研究である。桜井(2002)は、ライフストーリー研究のような個人に焦点を当てた研究は、「個人がこれまで歩んできた人生全体ないしはその一部に焦点をあわせて全体的に、その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうする」(p.14)社会調査における1つの試みであると説明している。つまり、個人の研究を通じて社会のあり様を捉えようとするものである。

では、対話的構築主義では、個人と社会をどのように関連づけているのであろう

か。まず、「その人自身の経験から社会や文化の諸相や変動を読み解こうとする」と説明されているため、シュッツが示したように、科学的知識に基づいた2次的構成概念を介さず、「人々の日常の体験のなかに現れたままの社会」(那須, 1997, p.243)を射程としている。人びとが日常生活において社会的に構築している社会である<sup>3</sup>。

また、桜井(2002)は、個人と社会の関係について「ライフストーリーの同形性」(p.246)という概念を提示している。この概念は、様々な語り手のライフストーリーの間で、類似した語りの様式があることを示している。「ライフストーリーは個人的なものであるが、コミュニティや全体社会に広く流布したストーリーから大きな影響を受けて」(桜井, 2002, p.11)いる。つまり、個人のライフストーリーのなかに、社会を反映した内容が含まれているというのである。以上のことから、桜井(2002)は、「人びとが何を伝えようとしているのか、いかに自分の人生を解釈しているのか、何を重視しているのか、について一般化や理論構築の可能性もある」(p.173)と述べている<sup>4</sup>。

個人に焦点を当て、関係的な存在である個人が語るストーリーに反映される社会、文化をも読み取ろうとする対話的構築主義の特徴は、多文化関係の理解と説明を志向する研究に対して、少なくとも2つの点で有効である。まず、第1に、社会的関係の集積である「フィールドとしての個人」(佐藤, 1995, p.15)を捉えるライフストーリーの視点は、多文化関係のなかで複雑な文化的・社会的アイデンティティを形成している人々の認識世界を理解し、説明できる可能性をもたらす。

例えば、帰国子女の多くは、日本国外で生活した後帰国し、海外と日本といった2つ以上の文化を背景とする「境界的文化」(水田, 2000, p.42)を生きる人々である。帰国子女に限らず、グローバル化を背景として人々が生活する文化的状況が複雑化

3. ウールガーとポーラッチ(2000=Woolger & Pawluch, 1985)は、構築主義では、「現実社会的に構築される」という反実在論の立場をとりながら、実は、扱う問題や状態の外在的かつ客観的存在が想定されており、矛盾していると批判した。構築主義の立場は、様々な言い方で論じられているが、ここでは以下のような立場であることを述べたい。まず、誰もがそれと認める「真実の」「正しい」「客観的な」現実が外在的に存在しているという立場はとらない。実証主義的研究を行う社会学者は、基本的に、この「客観的な」現実を追求している。桜井(2002)では、E・ブルナーの生の三様態が示されたが、語りのなかで示される生(life as told)および経験(life as experienced)という現実のほかに、観察可能な生活としての生(life as lived)を前提としている。したがって、何らかのものは存在しており、それは多様な視点から経験され、多様に解釈され、現実がそれぞれの視点から構築されるというゆるやかな立場をとる。ここでゆるやかと表現したのは、あたかも世界に物質的なものが存在せず、すべてが人々の認識のなかで構築されるといった印象を与える反実在論とは立場を異にすることを示すためである。対話的構築主義の立場は、何かしらの実在は認めており、その実在世界を経験し、解釈し、語るプロセスが社会的な関わりをなかで行われ、人々がそれぞれの現実を構築するという捉え方であると考えられる。

4. ただし、桜井(2002)は一般化については慎重な態度を堅持している。「ライフストーリーを一般化、普遍化しようとして支配的言説やモデル・ストーリーへと回収する解釈が、たえずそれぞれのライフストーリーの個性性と独自性の契機を奪ってしまうことになりかねない(p. 11)」という懸念を表明している。たしかに、早計な一般化は、個性性を排除し、社会的規範や文化に関する理論で個人を説明する伝統的な社会学的思考法に陥ってしまう。対話的構築主義は、エスノメソドロジー、構築主義、語り(物語)論と多くを共有するアプローチ(桜井, 2002)であるため、エスノメソドロジーで示されているように、ローカルな文脈において個人が出来事を秩序立てる仕方を記述し、その仕方が単にミクロなものだけでなく、より大きな社会に当てはまるものである場合、一般的な説明ができるのであろう。ミクロかマクロかの選択をせまる二元論とは一線を画したエスノメソドロジーの見方が対話的構築主義に反映されていると考える。

してきている。世界各地で多文化社会化が進み、文化、宗教、価値観の対立、融合が起こっている。個人ではなく、集団に依拠してきた捉え方では、国民文化といった全体社会の内部で多様化し、複雑化した状況を捉えることが困難である。それは、集団の文化、規範などで個のあり様を説明するという研究者の視点中心のトップダウンな伝統的思考法が働くからである。

それとは対照的に、個々人の語りから多様な個のあり方を記述する対話的構築主義は、「境界的文化」を生きる人々が捉えている多様な現実を理解しようとするボトムアップな試みであるといえよう。このアプローチは、多文化的状況において、人びとが相互影響過程を通じて得る固有の現実認識を理解し、説明する上で有効であると考えられる。

第2に、個人と社会・文化を関連付けて解釈する対話的構築主義の研究は、個別性にのみこだわらず、多文化的状況で語り手の語りを制約している社会・文化的な側面(関係)を「同形性」という視点から捉えるものである。同形のライフストーリーを材料にして、語り手が関わる多文化関係について仮説を生成し、説明モデルを構築するという考え方もできるのではないだろうか<sup>5</sup>。対話的構築主義を介して得た仮説や説明モデルの妥当性は、理論的サンプリングを用いた質的研究や統計的サンプリングを用いた実証的研究で検証することもできよう(石黒, 2007)。このような対話的構築主義を発端とする一連の研究プログラムによって、生活者の視点を汲み取り、研究者が提示した理論中心の視点に囚われない形で、人びとが実際に経験している多文化関係に関する知見の創出が可能となるのではないだろうか。

以上のように、対話的構築主義の個人に焦点を当て、かつ、個人と社会を関連させて解釈するアプローチは、複雑な文化的状況で生きる人々が捉えている現実とその現実について語る人々の語りに反映される多文化関係を解明し、その関係に関する仮説の生成を可能にする。次に、「語りとしての生」という視点から対話的構築主義について論じ、その有効性について議論を進めたい。

#### 4. 語りとしての生

桜井(2005)は、従来の質的研究法において、「語られたことが体験されたことや実際に起きた出来事を表象していると素朴に受け取られてきた」(p.12)と指摘してい

5. 石黒(2007)では、都内の英会話・英語学校で働くアメリカ人講師を対象とし、対話的構築主義に基づいた研究の成果を一部紹介している。そこでは、アメリカ人講師たちが「外国人スタッフvs. 日本人スタッフ」という対立構図によって日本人の主任講師やマネージャーのコミュニケーション行動について語る同形のストーリーが流通しているという仮説的理解を示した。そのストーリーの流通と再生産が英会話・英語学校におけるアメリカ人スタッフの認識世界の構築に寄与しているという考察結果を提示している。

る。それに対して、対話的構築主義においては、「語りは過去の出来事や語り手の経験したことというよりは、インタビューの場で語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的混交体」(桜井, 2002, pp.30-31)であるとしている。すなわち、語りは、語り手とインタビュアー(調査者)とがインタビューという相互作用の場を通じて構築するものであるという見方である。

この見方を説明するために、桜井(2002)は、E・ブルナーが示した「三つの生(ライフ)」に言及している。ブルナーによれば、生には、「生活としての生」、「体験としての生」ならびに「語りとしての生」がある。「生活としての生」は、実際に起きた出来事で第三者にも観察可能なものを示している。「体験としての生」は、語り手が、実際に起きた出来事を自己の認識フィルターを通じて経験することで得たイメージ・記憶を示す。「語りとしての生」とは、日記、自伝、備忘録として文字化されたもの、ならびにスピーチやインタビューによる口述を含む言語化された生である。最後に示した「語りとしての生」は、「ライフストーリーを中核とする言語的表象であって、言語行為としての文化的慣習、聞き手との関係や社会的文脈によって左右されるものである」(桜井, 2002, p.32)。では、この見方が、多文化関係研究の何に対して有効なのであろうか。

この見方は、語られたことと実際に起きたことを単純に同一視していない。したがって、多文化的状況で実際に何が起き、何が事実かということインタビューによって明らかにしようとする立場をとらない。その代わりに、明らかにしようとする対象を客観的な事実から、多文化的状況での経験を人々がどのように言語化しているかへとシフトする。したがって、人々が多文化的状況における関係とそこで生起するシナジーを含む現象を彼らなりのやり方で秩序立てて言語化する日常の方法を解明しようとする。これは、多文化関係を生きる人々が多文化関係をどのように理解しているかを考察する手掛かりとなり、そのような内容を持つ研究は、実際に多文化的状況で問題を抱える人々の認識世界を理解し、問題解決の方向性を示す社会的応用性のあるものになる可能性を秘めている。

## 5. 調査者の位置づけ

実証的研究で実施されるインタビューにおいては、調査者と調査の対象となる回答者の位置づけは明確に規定されてきた。調査者は、中立的な立場から、誰がインタビューを行っても同様の回答を引き出せるような適切な方法を用いてインタビューを行う。一方、回答者は質問に応じて記憶していた内容を提供する「回答の容器」(ホ

ルスタイン&グブリハム, 2004, p.29)としての役割を果たす。

それに対して、対話的構築主義では、調査者の存在が語りに影響を与えることを認め、分析の対象についても、語り手の語りだけでなく、調査者と語り手の相互作用をも対象とする。したがって、調査者と語り手との間に形成される社会的関係も重要な分析の対象となる。

それらの社会的関係は、語り手が調査者をどのように捉えているかによって変化する。語り手は、調査者を必ずしも固定的に見ているわけではなく(桜井, 2002)、インタビューの過程でも、調査者を「外部者」、「研究者」、「日本人」といった様々な見方で捉える可能性がある。ジェンダー、社会的地位、年齢、民族等によって捉え方が変化するのである。また、相手によって、語り手自身も自己の捉え方を変化させ、両者の関係は変化していく。浅野(2001)によれば、人々は他者との関係において語るべき出来事を選び出し、並べ替えるため、関係によって物語は変化する可能性がある。

以上のような前提に立って、対話的構築主義は、インタビューという会話的相互作用における関係の変化が、語り手が「何を」「いかに」語るかに反映される(桜井, 2002)という見方を提供している。そのため、語り手と調査者(インタビュアー)のインタラクションを分析の対象とするのである。灘光(2006)は、異文化コミュニケーション研究における社会構築主義の影響を論じるなかで、次のように指摘している。

研究者をデータと別個の存在としてみなすのではなく、語り手とともに意味を構築していく共同作業者と位置づけ、解釈する際にもその要素を考慮する姿勢が求められよう。例えば、在日朝鮮人が感じる日本人の差別意識をテーマにしたインタビューを日本人が行う時と、同じ在日朝鮮人が行う時とでは、その語りと同じかどうかを考えて見るとよい。日本人のインタビュアーには話せない経験を、同胞に対しては、仲間内で通用する表現や語彙を使って語ることもあるだろう。あるいは、日本人だからこそ、訴えたい、伝えたいという話が違った文脈で聞けるかもしれない。調査者と語り手の関係性を無視しては、解釈そのものに歪みを生じかねない(p.139)。

インタビュー自体が相互作用であり、調査者と調査対象者は相互影響関係にある。そのことを「中立性」を理由に主題化しないことは問題であろう。

ここで、調査者の位置づけについて、林(2004)の「1階の論理」と「2階の論理」とい

う区分けを用いてさらに考察したい。林は、客観的法則性を前提とし、その追求を可能にしようとする立場を「1階の論理」と呼ぶ。他方、主体によって捉えられる主観的現実および複数の主体によって共有される間主観的現実を前提とし、法則性を真理として見なすことなく、仮定として捉えようとする立場を「2階の論理」と形容している。

1階の論理から2階の論理へ移行することはパラダイムシフトである。ただし、パラダイムシフトというと、一方が他方を否定するかのような見方が多いようだが、林(2004)は「2階は1階を否定するのではなく、包含する」(p.207)と述べている。したがって、2階の論理は、1階のパラダイムを「客観的現実を仮定する1つの見方」として、より高次のメタ・レベルから俯瞰する視点である。

対話的構築主義は、林(2004)のいう2階の論理に依拠している。つまり、1階の論理も1つの見方として相対的に捉えることができる。したがって、研究者自身が行う分析や解釈についても、ある仮定に立って行っている分析および解釈として捉え、メタ・レベルから相対化する。そのため、研究者は自らが行う解釈に潜む前提に注意を払いつつ、研究活動を行うこととなる。

上述した調査者と語り手のインタラクションの主題化も、研究活動自体をメタ・レベルから捉える2階の論理が働いているからである。したがって、対話的構築主義は、常に自己批判的な視点を研究者に要求している。では、このような自己内省的、批判的スタンスから、調査者を脱「中立」化し、語り手と調査者のインタラクションを対象とするという対話的構築主義の特徴は、多文化関係研究の何に対して有効なのであろうか。

この特徴は、多文化関係の研究において、研究者が自己の研究に含まれる仮定に対する自覚的な意識を堅持しつつ、多文化関係に関する分析および解釈を慎重に行うことを促すと考えられる。「中立」の立場では見落とす可能性がある、語り手に及ぼすインタビュアーの影響について配慮しつつ、語り手の現実構築のあり方を理解することが可能となる。結果として、多文化関係を慎重に読み取ることができる。もちろん、このような研究の成果を発表もしくは作品化<sup>6</sup>する具体的方法は今後も多くの研究者によって模索されるべきであろう。

## 6. 結語

本稿では、対話的構築主義の特徴的な側面について論じ、その研究方法が多文化

6 具体的な研究事例は、『ライフストーリーの社会学』(山田富秋編, 2005, 北樹出版)に紹介されている。



関係研究に対して有効であることを論述してきた。まず、個人に焦点を当てることによって社会・文化を理解するという発想の転換が示された。個人に着目したことで、一般化した知見で隠されていた多文化社会を生きる多様な個々の個別性が記述され、複雑化する多文化的状況における人びとのあり様を捉える試みが可能となる。

また、人びとによって言語化された認識世界を記述することによって、彼らにとって重要な問題とその問題を形成している社会的関係をくみ上げるボトムアップな研究のあり方が示された。ボトムアップ・アプローチは、欧米の研究者が中心となって提示してきた既存の理論・概念を当該の多文化的状況に当てはめて検証、理解、説明するという営みではなく、多文化的状況とそこで形成される多文化関係について新たな仮説の生成や説明モデルの構築を可能とするアプローチである。

さらに、調査者の位置づけを語り手とともに語りを構築する行為者とし、調査者自体も分析の対象とされた。この視点は、研究者を中立的な立場においてきた従来型の研究フレーム自体が1つの仮定であることを明らかにした。実際には研究者と語り手は相互影響関係にあり、多文化関係に関する十分な理解のためにはこの点を無視できないことが示唆された。以上のような内容は、多文化関係研究における対話的構築主義の有効性を示しているといえよう。

本稿は、多様な文化的背景を持つ人々が相互作用を営むなかで形成する多文化関係のあり方を理解し、説明をしようとする研究に対して、1つの有効なアプローチとして対話的構築主義のライフストーリー研究を取り上げた。桜井(2002)によれば、対話的構築主義は、エスノメソドロジー、構築主義、語り(物語)論と多くを共有するアプローチである。したがって、この研究方法は超領域的であり、また、上述してきたように、多様な文化の相互作用とそこで形成されるダイナミックな関係を人々の語りを介して捉えようとするものであった。グローバル化が進展し、多文化の相互作用が増加する可能性を踏まえ、多文化関係のあり方を理解し、説明する研究は21世紀の重要な研究領域であるといえよう<sup>7</sup>。その研究にどのような研究方法でアプローチすれば、何が有効に解明される可能性があるのかについて考察が深められるべきだと考える。本稿における議論は、やや抽象的であったが、そのような考察の試みの1つである。今後も多文化関係に関する研究アプローチについて考察を展開していきたい。

7. 対話的構築主義は、『多文化関係学』の投稿規程で提示されている4要件(文化性の視点、関係性の視点、超領域性の視点、パラダイムシフトへの配慮)をすべて満たす内容を備えている。

## 引用文献

- アドラー, N. J. (1996) 『異文化組織のマネジメント』(江夏健一・桑名義晴監訳). セントラル・プレス.
- 浅野智彦 (2001) 『自己への物語的接近 —家族療法から社会学へ—』勁草書房.
- 林吉郎 (2004) 「ポストモダン研究方法 —6眼のパラダイムシフト—」『青山国際政経論集』, 62, 203-217.
- ホルスタイン, J. A. & グブリアム, J. F. (2004). 『アクティヴ・インタビュー—相互行為としての社会調査—』(山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳). せりか書房.
- 石黒武人 (2007) 「英会話・英語学校における『日本人リーダー』のコミュニケーション行動 —アメリカ人メンバーの視点から構築されるリアリティー—」『異文化コミュニケーション』10, 149-169.
- 難光洋子 (2006) 「社会構築主義が異文化コミュニケーション研究に与える影響についての—考察 —方法論を中心として—」『成蹊英語英文学研究』10, 133-147.
- 中野卓 (1981) 「ライフヒストリーによる人間研究」『私の履歴書 (経済人 別巻)』 (pp. 50-56). 日本経済新聞社.
- 那須壽 (1997) 「シュツと現象学的社会学」 那須壽 (編) 『クロニクル社会学 —人と理論の魅力—を語る』 (pp. 181-197). 有斐閣.
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井厚 (2005) 「ライフストーリーから見た社会」 山田富秋 (編著) 『ライフストーリーの社会学』 (pp. 10-27). 北樹出版.
- 佐藤健二 (1995) 「ライフヒストリー研究の位相」 中野卓・桜井厚 (編) 『ライフヒストリーの社会学』 (pp. 13-41). 弘文堂.
- 千田有紀 (2001) 「構築主義の系譜学」 上野千鶴子 (編) 『構築主義とは何か』 (pp. 1-42). 勁草書房.
- ウールガー, S.・ポーラッチ, D. (2000) 「オントロジカル・ゲルマンダリング: 社会問題をめぐる説明の解剖学」(平英美・訳). 平英美・中河伸俊 (編) 『構築主義の社会学: 論争と議論のエスノグラフィー』 (pp.18-45). 世界思想社.